
袂魔師の助手

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

被魔師の助手

【Nコード】

N2075Z

【作者名】

蜃

【あらすじ】

小野綾、二十一歳。職なし、彼氏なし、金もなし、愛想もなし。特技は「幽霊」が見えること。ある冬の日、仕事をくれと神社に参拝した時、手違いで異世界とやらに召喚されてしまった。その上十年は帰れないと言われ、仕方なく職探し相談のために教会を訪れたところ、被魔師のくせに幽霊が見えないお人好しな青年に雇われることになり……。

その一

日常にひそむ非日常がその顎あごを開くのは、いつだって突然だ。

刷毛ではいたような薄い雲の浮かぶ青空の下を、ひとりで歩道を歩く若い女性がいた。

長くくせのない黒髪に、黒い厚手のジャケットとジーンズ、白いマフラーという飾り気のない出で立ちをしている。顔立ちはややきつめで、見ようによっては美人に見えた。鼻の頭は寒さのために赤くなり、吐き出す息は白く煙るように彼女のまわりをとりまく。

女性の名前は小野綾という。一か月前にただひとりの肉親であった父を亡くし、今は職探しのためにハローワークへ行く最中だった。

そんな綾は、彼氏なし、金もなし、愛想もなしの二十一歳。唯一の特技はと言えば……。

綾はふと立ち止まり、目の前を通過していく半透明の物体を視線だけで見送った。その半透明の物体は明らかに人間であり、足の部分だけがない。つまりは「幽霊」である。綾は幼い頃からなぜか幽霊を見ることが出来たのだ。まあ、特技と言っても役に立ったことはないのだが。

小さい頃にはよく彼らに振り回され、おかげですっかり人間不信

になってしまった。死んだあとの人間と言うのは、肉体を失うリスクがないからか、やけにはっちゃけていることが多い。その上、未練があるから成仏出来ないため、性格が非常にねじ曲がっている。

そのことに気づいたのは、何度か痛い目にあっただった。

綾は目の前を通過して近くの立派な二階建ての家へ消えた老人の霊を見てから、再び歩きだす。

彼らには関わらないのが吉である。

と言っても、見える以上はどうしても気になってしまう。そのせいで、職を転々とする羽目になってしまった。綾はため息をついて思う。あいつらが見えなくなるなら、なんだってやるのにな、と。

しばらく歩いて行くと、小さな神社があるのが見えた。鳥居の朱は剥げかけているが、手入れはきちんとされている。管理しているのは町内会らしい。小さいアパートの一室程しかない小さな建物の周りには松が植えられ、そこだけ他の風景から浮いて見えた。ここを過ぎればバス停はすぐだ。

綾はいつも通り通り過ぎようと思ったのだが、何となく立ち止まると、神社に足を向ける。どうせならダメもとで参拝していこうと思ったからだ。そして、ポケットから財布を取り出して十円を手にとると、さい銭箱に放り投げて二礼二拍手一礼の後に、つぶやく。

「どうか、次こそは幽霊に悩まされない職場に行けますように」

切実に思いを込めて言う。

その時だった。

足もとが突然光り輝いたのだ。綾は驚いて、声を上げることすら出来なかった。そのまま、地面に足がずぶずぶと埋まって行く。何が起こっているのだろう。頭が混乱して、唇をわななかせることしか出来ない。やがて、完全に首元まで埋まって、綾は意識が遠くなるままに、気を失った。

何だか痛くて寒くて騒がしい。頭が重く、鈍い痛みを感じる。

綾は唇から小さなうめき声を上げながらゆっくりと起き上がった。こじ開けた視界はぼやけていて、すぐには状況がつかめない。目の前で、何やら三十代くらいの白人っぽい男が大げさな身振りで何かを叫んでいるのが辛うじて分かる。何と云うか、とにかくうるさかった。

また、彼の叫んでいる言葉が全くわからない。英語ですらなさそうだ。

次第に目が見えるようになってくると、自分の置かれた状況の異常さに気づく。同時に、巨大な氷を飲み込んだように胃が痛み、背すじには悪寒が走った。

「……私は一体」

綾は茫然と呟いて、周囲を見回した。

黄色みがかつた白い石壁に四方を囲まれた室内は明るく、左手にある木製の棚には革表紙のかなり重そうな本がぎっしり並び、そのすぐ横の台には見たこともない道具がずらりと並んでいる。壁には天体や人体を描いた厚手の布が何枚も垂れ下がっていた。

部屋はかなりの広さがあり、綾はその中央の床の上に横たわっていらしい。床に目をやると、幾何学的な模様が描かれた薄い布が敷かれており、綾はその図の真ん中に座っている状態だ。

すると、涙を流しながらわめいていた男を押しつけ、五十代くらいの厳しい顔つきをした男性が綾の側までやって来て、額に右の人差し指を当てた。

注がれる眼差しが冷たい。綾は恐怖と訳のわからない事態に頭が真っ白になり、微動だに出来ないでいた。そんな綾にはお構いなく、彼は額に指先を付けたまま口の中で何ごとか呟く。

途端、それまで耳に聞こえていた音が変化した。

それまで厚いガラス越しに聞こえているかのようにくぐもっていた音が鮮明になり、さらには意味すら理解出来るようになったのである。

つまり、彼らの言葉が「日本語」に聞こえるようになったのだ。

「どづかね？ 私の言っていることがわかるかね？」

「……あ、はい」

綾は突然の問いかけに、戸惑いつつも頷いた。

言葉が理解出来るようになったことで、思考する力が戻ってきたことに気づくと、自分が五人の体格の良い男たちに囲まれている状況に、綾は慄いた。

これ、マズいんじゃないの。

何をされるかわかったものではない。綾は何か武器に使えそうなものはないかと視線を巡らせると、壁に頑丈そうな杖が立てかけられているのを見つけた。だが、距離がありすぎる。あれを手にする前に取り押さえられてしまいそうだ。

とはいえ、何か対策を講じなければ、と早鐘を打つ心臓をなだめながら、すぐに動けるよう体に力を入れて構えていると、額から指がどけられ、男性はほっとしたように肩の力を抜いた。

「さて、突然のことに困っているだろうが、まずは私の話を聞いて欲しい。

まずはそうだな、ここがどこだか知りたいだろう。いいかね、ここは君がつい先ほどまでいた世界とは異なる世界だ。今いるこの地はフェガルス王国が統治するラーゼという街。そして、この建物は私の家であり、今はここである試験を行っていたのだが、部下が少々やり過ぎてしまっただね」

嬉しそうだが、困ったなと言いたげな顔で、男性は綾の返事を待たずに説明を開始した。

「実はね、一カ月後に別世界から若い娘を召喚するという儀式が控えているのだ。これは我がフェガルス王国が十年ごとに行っている

神託のひとつでね、健康な若い娘、出来れば美人が望ましいのだが、ともかく娘が呼び出せれば後の十年は平和が約束されるが、男や物や魔物が現れた場合、不吉なことが起こると言われている。

私は今回その儀式の陣頭指揮を執る事になっていてね、失敗したら文字通り首が飛ぶんだ。

そんな訳で、入念に試験を重ねていたと言う訳だ。そんな中、部下のひとりがかうっかり召喚陣を起動させてしまったのだよ」

ゆっくりと丁寧に語られる彼の言葉に耳を傾ける内に、綾にも少しずつ事情がのみ込めてきた。ようするに、今後十年間の吉凶を占う儀式のテスト中ということらしい。

「君はたまたまその時に陣とつながる神域にいたのだろう。そのため、運悪くこちらへ連れて来られてしまったと言う訳なのだよ。さて、ここまでの話はわかってもらえたかね？」

「はあ、まあ、なんとなくは……」

そう答えると、男性は満足げに三回ほど頷いて、さらに語り続けた。

「賢い娘さんで良かった。さて、ここからが大切なのだが、娘の召喚は儀式の最中に成功させなければ意味がないのだよ。今ここで成功しても、無意味なのだ」

「……じゃあ元の場所に帰して下さい」

綾が半眼で言うと、男性はさも残念そうな顔をした。

「そうしてあげたいのは山々なのだがね、一度こちらへ来てしまっ

たら十年経たないと召喚陣が発動しないのだ。詳しい理由は明らかになっていないので説明は出来ないが、とにかく、この先十年間はここで暮らしてもらはなくてはならない。

まあ、もし君がまだ十年後、元の世界へ戻りたいと思ったのなら、また私を訪ねると良い。その時は責任を持って戻すことを約束しよう。

ただし、君が自分是我々の失敗で召喚されたということを誰かに話した場合、その瞬間に君は死んでしまう。先ほど君の額に術を掛けておいたのだよ。そうなってしまうたらもう戻れないがね」

勝手に呼んでおきながらやたら理不尽なことを言うと、男性は沈黙した。

綾が何かしらの反応を見せるのを待っているらしい。激しい怒りを通り越して脱力していた綾は、大きなため息をついた。

その二

内心では、何勝手なこと抜かしやがるこのクソ野郎共と思いつつも、怒ったところで不毛なのはわかっている。すでに起きてしまった事にとやかく言っても、どうにもならない。男性も、その後ろの男たちも何もしゃべらず、静かなのを良い事に返事もせずに状況を整理してみる。

- ・ どうやらここは地球ではない。
- ・ 吉凶占いの試験中に凡ミスでここへ連れて来られてしまった。
- ・ 元の世界へ戻るには十年待たなければならぬ。
- ・ 十年後に戻してくれる気はあるらしい。
- ・ 凡ミスの事を喋ると死ぬ術にかけられている。

今のところ理解出来たのはこれくらいだ。そう、理解はした、だが納得はしていない。精神的にも肉体的にも実感はわからない。頭の中は真っ白だった。まるで寝起きの時のように、意識がはっきりしない。衝撃が大きすぎて、全てがついて行けていないようだ。

そんな飽和状態の綾の脳に浮かんだことは、皮肉にもここへ来る前と全く同じことだった。

仕事……見つけなきゃ、住む場所も欲しい。けど、こいつらに頼るとかは嫌だな……。

結論は出た。

綾は立ち上がると、男性と真っ向から向き合う。

「わかりました。じゃあとりあえず、仕事と住む場所を見つけるまでの間をしのげるお金を下さい」

きっぱりと告げて、男性の目をじっと見る。自覚はあった。今の自分は相当変に見えているだろうと。だが別に構うことなどない。こちらら死活問題なのである。

男性は茫然とした顔で綾を見て声を失っている。それほど意外な反応だっただろうか、と綾が考えていると、男性の後ろにいた男が大きな笑い声を上げた。

「はっはっは、すごい娘さんだな。魔術師長様、もしかしたら儀式で呼び出される予定だった娘さんをもう呼んじやったんじゃありませんかね？」

見た目も精神面も、王妃にしたって問題なさそうですよ、彼女」

そう腹を抱えて笑いながら言ったのは、長い黒褐色の髪をした軟派な印象の三十代半ばくらいのひげの男性だった。他の男たちはどこか学者肌というか、細くて神経質そうなものに対し、彼だけはやらふてぶてしそうであり、どこか浮いている。綾はなんとなくイタリア人男性を想像した。

「……ダグラス、口をつつしめ」

魔術師長と呼ばれた壮年の男性は苛立った口調でイタリア男をたしなめてから、何度か咳払いをしてから綾に向けて告げる。

「わかった、いいだろう。部下の失敗を防げなかった責任は私にあるからね、それでは、少し待っていたまえ」

いかにも本当はそんなことまでしてやる義理はないが、自分は心が広いので施しをしてやる、という尊大な態度がカンにさわる。せめてひと睨みくらいはくれてやるうかと思っただが、その時彼はすでに綾に背を向けてしまっていた。そのままさっさと部屋を出て行ってしまふ。

綾はチツと舌打ちをした。

すると、先ほど魔術師長とやらに怒られたイタリア人っぽい男性がダグラスが歩み寄ってくる。他の三人は遠巻きにこちらを眺めているだけで、声をかけるつもりはないようだ。

綾をうっかり召喚してしまった男に至っては、壁の前に座り込んで青い顔をしている。今にも泣きだしてしまいそうで、気の毒に思ったものの、彼のせいでこんな目にあっていることは事実であり、心から同情することは出来なかった。

「さあて、じゃあまあ魔術師長が金持ってくるまでに入口に連れて行ってあげるよ。この館って広いからさ、迷子になったら困るでしょ？」

ああ、俺はダグラスって言って、副魔術師長なの、よろしくね。にしても、魔術師長もケチだよねえ、ここに置いてあげたていいのにさ、本当、融通がきかないと言っか頭が固いと言っか、それでいてプライドは三人前くらいだし、困った人だよね。」

軽薄な調子でぺらぺらとまくしたてながら、ダグラスはごく自然な動作で綾の肩に腕をまわしてくる。綾は無表情のまま、彼の手の甲を思いきりつねった。

「あ痛たたた、何すんの？」

「妻でも恋人でもない初対面の女の肩に腕をまわす事の方が何すんの？ だと思えますが。」

「気安く触らないで下さい。べたべたされるのは嫌いなんです。それに、ここに置いてもらうのはそちらから頼まれたとしても嫌ですから」

涙目でこちらを見つめるダグラスに冷たく告げると、綾は歩きだす。

「あらら、俺嫌われちゃった？ けど、個人的には取り入っておきたいんだけどな」

背後からかけられた声に、綾は立ち止まって振り向く。ダグラスの顔を訝しげに見やれば、口もところそ笑っているものの、髪と同色の目はひどく冷たい事に気づく。

「何故です」

あまりの落差について気になって訊ねると、答えはあっさり返ってきた。

「うん、あのね、こちらへ召喚された娘さんたちは大抵何かしらの特殊能力を持っているんだよ。それを活用するかしないかは娘さんの自由だし、大概は王妃か貴族の妻におさまるのが普通だ。でも、中には自分の能力を活用して名を残した人もいるんだよ。」

俺としては、将来偉い人の妻になったり、凄いことをやらかしそうな人には出来るだけ嫌われたくないんだよね。どうせなら顔と名前を覚えてもらって、知人として後で美味しい思いをしたい訳」

低めた声で早口に語られた内容に、綾は目を見張る。

特殊能力とは何のことだろう。今のところそれらしい兆候は見られない。もしや、幽霊が見えることなのではないだろうか。だとしたら、名を残すほどのものとも思えない。

「……残念ですが、私にそんな力はないと思います。大体、失敗だったんでしよう、私がここに連れてこられたのは。それより、ここでは仕事を探す時にはどこへ相談したら良いですか？」

綾は事実を返しながら問うた。ダグラスは張りつけたような笑みを消してから、一瞬真顔になり、次いで肩を落として苦笑した。今度の笑みには温かみがあった。

「さあねえ、生まれてこの方職探しなんてしたことないし、とりあえず教会に行ってみたら？　ここでは相談は教会に持ち込むのが一般的だよ」

綾は「そうなんですか」と答えた。彼は「そうなの」と返し、綾をこの家の入口まで案内してくれた。彼の言った通り、案内がなければ迷子になってしまいそうだ。これが家とか、金持ちの感覚は一生理解出来そうにないなと思いつきながら歩き、やがて建物の外へ出る。

ダグラスは、綾に「魔術師長から金貰ってくるから、待ってて」と言い置くと建物の中に姿を消した。綾は小さく嘆息して、周囲を良く観察してみることにする。

金属製の門の柵には天使らしき生きものの彫像がある。そんな柵を出るとすぐに道が左右に伸びており、馬車や人がひっきりなしに行き来している。

ぼんやりと眺めていると、綾は口もとを引きつらせた。なぜなら、目を疑うような存在が多量に視界に入り込んできたからだ。

例えば、青や桃色の髪の間人。どう見てもワニっぽい生きものを散歩させている紳士。ほうきに乗って頭上を飛んでいく黒い影。背中に鳥の羽を生やした人。動物の頭と人間の頭をとりかえたような二足歩行する狼。などなど、挙げて行けばキリがない。

建物や街並みなどはヨーロッパのものに非常に近いが、細部は色々とは異なっている。

正直、魔術師長とやらにここは異世界だなどと言われたときは半信半疑だったのだが、目の前の光景を見た後では、流石に信じるしかなかった。

綾はあまりのことに、呆然とその光景を眺めつづける。

本当に、何も知らない世界へ連れて来られてしまったんだ。

強い実感に、綾は心も体も冷えて行くのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2075z/>

祓魔師の助手

2011年12月23日00時51分発行